

ハーバート・スペンサー

心理学原理 第二卷 (第六部第一五章および第一六章)

岡嶋隆佑 訳

Herbert Spencer

The Principles of Psychology

Volume II, Part VI, chapter 15 and 16

Translated by  
Ryusuke OKAJIMA

*The Principles of Psychology,*  
Volume II,  
D. Appleton and Company,  
1920, pp. 207-231.

# 第一五章

## 時間の知覚

### 第三三六節

私たちの〈時間 (Time)〉概念と〈空間 (Space)〉概念に密接な関係があることは、現在のさまざま言い回しの中に暗示されている。a great space of time というフレーズでは、一方〔空間〕の大きさが、他方〔時間〕の大きさを示すために用いられている。反対に、スイスにいる旅行者は、距離について尋ねると、シュトゥンデン、つまり時間で答えられることで、未開人は、古代へブライ人と同様、ある場所を幾日もの旅が必要なものとして説明されることで、時間が空間を表現するために使われていることに気づく。こうした象徴の相互作用は、科学においても生じている。一秒が振り子の長さの関数であることや、私たちの時間が文字盤上の空間によって測定されるということばかりではない。一度とは、元来、黄道上の太陽の一日の行路であったのだが、それが〔そのまま〕角度の間隔の名称となったのである。

前章の議論と併せて考えるなら、これらの事実には大きな意義がある。遠い昔、文明化されていない国々において、人は〈空間〉を〈時間〉によって表現していたに違いないということ、またその後、進歩 (二) の結果として、〈時間〉を〈空間〉によって表現するようになったに違いないということ——こうしたことは、先に展開されたさまざま

まな見解に対し強力な支持を与える事情である。そうした事情は、共存 (coexistence) の現象と継起 (sequence) の現象が、実際に精神の内で互いを表すようにできていることを決定的な仕方でも示しているのだが、そればかりでなく、先ほど〔前章において〕私たちが〈空間〉認知を獲得する際のプロセスとして説明された、精神的な継起はそれと等価な共存によって次第に置き換えられるというあの事態をも、より高い水準において、改めて示しているのである。運動 (motion) を伴う意識状態の系列 (series) が、その運動の間に踏破された同時的な位置 (ないし空間) についてのほとんど単一の意識へと統合され、その単一の意識が、その後で、自らの等価物であった系列を精神に対して表現するようになることが確認されたのとちょうど同じように、「一日の旅程」〔という表現〕が含意する意識状態の系列は、踏破され (マイルやリーグによって計測され) た共存的位置についての意識へと統合され、その実質的に単一の意識状態が、思考や言葉の上で、それによって表象される状態の系列に取って代わったのだということが理解される。精神による置き換えのこうしたプロセスについてさらに別の例を求めらるなら、「時計を見るなどして」想定していた時間よりも自分が三〇分遅れているのがわかったとき、「体感としては」針が示している印を全く超えておらず、自分がどれほど、その三〇分を連続において表象していなかったか、自分がどれほど習慣的に、文字盤上の間隔が表す期間の代わりに、文字盤上の間隔〔そのもの〕について考えるようになっていたのかということに気付く——そうした例が見出されるだろう。このような実例によって、継起を象徴するために共存を用いることは、これらの複雑な事例においてはとても習慣的なことになっているのに対し、最も単純な事例においては、有機的なことになっているという事態が、容易に想像できるだろう。

私たちの〈時間〉認知と〈空間〉認知のこうした相互性は、原始的な形態においても、最も発展した形態と同様であることが理解され、またその結果、そのいずれかを完全に単独で考えることは不可能であるということが示唆

されるに至ったところで「時間」についてより詳細に論じていくこととしよう。

### 第三三七節

「空間」と「共存」の概念が不可分であるのと同様に、「時間」と「継起 (Sequence)」の概念も不可分である。何らかの継起 (succession) について考えることなく、「時間」について考えることは不可能であり、「時間」について考えることなく、何らかの継起について考えることもまた不可能である。「時間」は、「空間」と同様、少なくとも二つの意識的な要素の間で関係を確立することによってしか思考され得ない。両者の相違は、「空間」の場合、それら二つの要素は一緒に現前している、あるいは現前しているように思われるのに対して、「時間」の場合、それらは一緒に現前していないという点にある。

「時間」は私たちの精神の諸状態の継起によってのみ知られ得るといふ主張は、ほとんど説明を要さないほどに確立されたものである。ここで必要なのはただそれを、前述のさまざまな主張と調和するような形で言い直すことだけであるように思われる。そのためにはまず、認識とは全くもって相対的なものであるという事実を思い起こしておくのが良いだろう。「関係」の「相対性」(Relativity of Relations) (第九一節) を扱った際、継起の見かけ上の長さは、「生物の構造やその大きさ、年齢、身体の状態、それが受け取る印象の数と鮮明さ、そしてそれら印象の意識における相対的位置」と共に変化するものだということが指摘されていたのである。

種の違いに伴う変異の原因は目下の探究に関連するものではないので省略するとすれば、ある時間の期間についての私たちの概念は、その間に経験し、想起された意識状態の系列の長さによって規定されていると言って良いだろう。想起された (remembered) 意識状態と言ったのは、意図があつてのことである。というのも、いかなる意

識状態の系列もただ記憶の働きによってしか知られ得ず、またすでに生じてはいたが記憶において表象されていない状態というのは、いかなるものであれその系列の構成要素とは成り得えない以上、想起された状態の系列だけが、ある過去の状態とある現在の状態の間で尺度の役割を果たし得ることになるからである。そしてこのことから、子どもによって振り返られたどんな期間も、大人によって振り返られた同じ期間よりも長く思われるといったような類のあらゆる事実についての説明が与えられることになる。というのも、同一の経験の系列であっても、その多くは、子どもには新鮮であるがゆえに深い印象を与えても、大人にとっては、ほとんど印象を残さないほどに馴染みのあるものなのだから。そしてそのように、意識の想起された諸状態の系列の長さが私たちの時間の尺度であるとすれば、非常に素早く次から次へと現れる鮮明な観念によって一晩が百年であるように思えたり、溺れている人に起こるように、数分が一生を表現したりするといった事例は、容易く理解できるようになるのである。

とはいえ、二つの出来事の間時間は介在する想起された意識状態の系列によって認識されると述べるとき、私たちは、より正確に言って何を意味しているのだろうか。二つの出来事は、それらが生み出した意識状態によって私たちに知られる。二つのうち最初の出来事の前には、無数の他の意識状態があった。後の出来事以降にも他の意識状態があった。それらの間にも他の意識状態があった。それゆえに、私たちはそれら二つの出来事を、自らの人生の間に経験された意識状態の系列の全体において特定の場所 (places) を有するものとして知る。二つの出来事のそれぞれが生じた時間 (時点) は、その系列におけるそれらの位置 (positions) として私たちに知られる。そしてそれらの間の時間ということで、私たちが意味しているのは、その系列におけるそれらの相対的な位置 (relative positions) である。いかなる共存的位置の関係——空間のいかなる部分——も、それらが私たちにそのようなものとして思考されるのは、介在するその他の位置の数によってである。それと同様に、いかなる継起的位置の関係

——時間のいかなる部分——もそれらが私たちに思考されるのは、介在するその他の位置の数によってである。それゆえ、ある特定の時間〔の期間〕というのは、意識状態の系列における二つの特定の状態の間の位置関係である。そしてまた、私たちに知られる〔時間〕一般とは、意識の継起的諸状態の間の位置の全ての関係から抽象されたものである。言い換えれば、〔時間〕一般とは、その中でそうした継起的状態が現前し、表象 $\parallel$ 再現化されるような空白の用紙 $\parallel$ 形式 (blank form) であり、これはどの状態に対しても同様に機能するがゆえに、どの状態にも依存してはいないものである。

〔なぜこのように述べるのか。〕それは、〔空間〕を扱った際に指摘したのと同様に、私たちの意識状態の系列において諸々の同じ位置は、過ぎ去りつつある状態からの距離によって見積もられるがゆえに、あらゆる種類の状態によって占められてきた結果、各々の特定の種類の状態から独立したものとして知られるようになるという事実こそ、ここでも指摘されなければならないことだからである。私の一連の思考を一定の距離だけ遡ったところに、常にある色の感じ (feeling) があつたとすれば、その場所とその感じの間には確立された連合があることになるだろう。しかし、その同じ場所は、ある時には触覚的感覚によって、ある時には聴覚的感覚によって、また別の時には、口蓋や鼻孔、内臓からやってくる感覚によって満たされるのだから、結果として、その場所は、特定の感覚や特定の感覚の種類から分離されることになる。そして同じことが、より近かったり遠かったりするものとして知られる他のあらゆる場所についても起こったことで、これらの場所の系列の全体が、その内に存在し得る諸々の感じとは別のもものと見做されたり、あるいは〔そもそも〕感じによって占められていないものと見做されたりすることによって、ひとつの〔時間〕意識へと寄せ集められるようになり、そうした〔時間〕が——ちょうど〔空間〕意識が、共存の全関係から成る空白用紙として生じることが確認されたのと同じように——継起の全関係から成る空白用紙と

見做されることになるのである。

### 第三三八節

カントの仮説の擁護者たちは、おそらく次のように反論するだろう。すなわち、〈時間〉意識は最初に経験される継起と共に与えられるものであつて、そうでなければその継起は継起として知られ得ないだろう、と。これに對して私はこう答へたい。継起は最初から継起としては知られず、継起が継起として完全に意識され、〈時間〉がその形式として完全に意識されるという事態は、同一の経験の積み重ねによつて生じることなのだ、と。

なるほどたしかに、生まれたばかりの意識においてさえ、継起的諸状態はそのそれぞれが互いに一定の位置関係にあるものとして——一方が他方に続いて生じるものとして、あるいは介在する状態によつて隔てられたものとして——認識されなければならないという結論に至る必要がある。最初のうちはおそらく、一度に観照され得る状態の系列の部分は多くはなく、またその系列の「互いに」隔たつた要素が関係をもつことはあり得ないのだが、最も単純な認識であつても、その系列のいくつかの「互いに」近接した要素は秩序づけられており、その各々の位置が——幾分曖昧な仕方ではあれ——知られるということを含意している。しかしながら、一定の相対的位置関係にあるどんな二つの意識状態を観照することも、それらの位置関係を他の位置関係に類似したものとして考えることも、それ自体では、〈時間〉の概念をもたらすことはない（そうしたことは時間概念が構成される際の素材ではあるのだが）。〈時間〉とは、私たちが理解する意味においては、系列における位置関係のうちのどれかひとつでもなければ、そうした位置関係のうちの二つの間の関係でもなく、それらの位置関係の全てから抽象されたものであつて、それらの位置関係の多くが知られ、比較されるまでは決して思考され得ないものなのである。この点を解明するために、



ある類似事例を考えてみよう。赤色の二つの同等な印象を受け取る生まれたての知性があるとしよう。それら以外にまだ何の経験も受け取られていないので、それら二つの印象の間の関係はどのようにしても思考され得ない。というのも、そこには、その関係をそこへと分類し得る関係や、その関係から区別され得る関係が存在しないのだから。[そこで、上記の二つの印象とは]別の二つの同等の赤色の印象が受け取られるとしよう。まだそれらの印象の間にはいかなる関係の観念も存在しない。というのも、そこには以前に経験された関係の反復はあるものの、何も何らかの種類に属するものとして以外には認識され得ず、種類というのは、まさにその本性によって、差異の確立を含意する以上、たったひとつの水準の関係しか経験されていない間は、いかなる関係の知識、いかなる関係の思考もあり得ないのだから。そこで、赤色の二つの、同等でない印象が受け取られるとしよう。二種目の関係が経験されることになる。そしてその後、そうしたペアが数多く現れるのなら、それらの構成部分は類似していきなりしていなかったりするので、それぞれの新たなペアの構成要素が、類似していきなりしていないものとして思考されたり、以前の関係と類似していきなりしていない関係にあるものとして曖昧な仕方でも思考されたりすることが可能となる。曖昧な仕方でも思考されるというのは、さまざまな赤色の印象だけが唯一の知られるものである間は、それらの類似 (likeness) や非類似 (unlikeness) の認識は印象そのものと明確には区別され得ないだろうからである。しかしながら、さまざまに異なる強度の緑色のペアのように、「赤色とは」別の何らかの種に属する印象のペアが受け取られるようになるとき、それらのペアの中からも、いくつか類似したものと類似していないものが生じることで、それらの「類似や悲類似の」関係は、緑色や赤色「そのもの」から分離されるようになるだろう。そして次に、経験の蓄積によって、類似していきなりいなかったりする音や味、匂い、大きさ、形、手触りが見出されるようになる」と、私たちが類似や悲類似といった言葉によって示す関係性は、部分的には、特定の印象「そのもの」

から思考において分離されるようになるだろう。つまり類似や非類似といった観念が生じ始め、類似や非類似を示す印象の種類が増えるにつれて、これらの観念はより判明でより抽象的なものになっていくのである。とすれば明らかに、多くの事物が類似していたりしていなかったりするものとして思考されるまでは、類似や非類似の観念は不可能なものなのである。私たちが目下問題にしている事例についても同様である。意識の諸状態の間のさまざまな位置関係が観照され、比較され、馴染みあるものとなった後に、そしてまた異なる位置関係についてのさまざまな経験が蓄積され、関係の観念をあらゆる特定の位置から分離するまでに至った後に、そうしたとき、それもその時になって初めて、意識の諸状態の間の位置・関係性という抽象概念——これが、それらの状態の時間における位置の概念を構成する——が、そしてまた寄せ集められた相対的な位置という抽象概念——これが、〈時間〉一般の観念を構成する——が生じ得るのである。

### 第三三九節

〈時間〉意識が、どの程度、その一般的な性格において、〈空間〉意識と同じように遺伝的構造によって固定されているのかということは、興味深い問いである。ある種の先行決定が存在することは、非常に確実なことであるように感じられるかもしれないが、その先行決定は、私たちがここでそれと比較しているもの〔空間意識〕に比べ、具体的なものではないと思われるかもしれない。

〔関係〕の〔相対性〕（第九一節）を扱った際、次のことを指摘しておいた。〈時間〉意識は、大きさや構造、機能的働きと共に変化するものだ——というのも、それぞれの生物に適した時間スケールは、第一にその生命機能のさまざまなリズムによってその生物の意識へと刻まれる印（mark）によって、また第二に、移動の機能のさま

さまざまなリズムによつてその意識へと刻まれる印によつて構成されるものであり、いずれのリズムの集合も種の違いに応じて非常に大きく異なるものだから、と。その結果、祖先から受け継いだ組成は意識の一般的な性格をおよその範囲内に留めることになる。私たち〔人間〕の場合、例えば、時間に対する尺度の私たちの単位 (mins) が収まるに違いない一定の幅 $\parallel$ 両極 (extremes) が存在することは明らかである。原始的な尺度の役割を果たす鼓動や呼吸の働きは適度な範囲でしかその速度を変えることができない。脚の交互の動きは、ある一定の遅さ以下では意識できないし、ある一定の速さ以上では押し出すことができない。私たちの外にある感覚的な運動がもたらす時間の尺度についても同様である。私たちの知覚には速すぎる運動もあれば、遅すぎる運動もあり、客観的運動を見ることによつて得られるような時間意識は、それら両極の間になければならない。

より広い〔時間〕意識がどの程度予め決まっているのか、どの程度、個々の経験が決めるものなのかといったことについてもまた、何も明確なことを言うことができない。ただし、意識がその範囲を把握できるような期間の長さは、遺伝的な神経構造によつてほぼ限定されている、と結論付けるための根拠を見出すことはできるかもしれない。というのも、数時間や数日の間隔を見積もるための力は、その経過の間に起こった出来事を表象する力に依存しているからである。ある老人が、自分が二日前に何をしていたかを思い出せないことが示しているのは、最近受け取られた印象の系列を表象することが難しくなればなるほど、直近の長い間隔を見積もることができなくなる、という事態である。この事例は、機能不全の結果を説明するものであるが、私がこの例を引き合いに出すのは、ただ時間意識と表象能力の結びつきを示すためにすぎない。それを終えたので、残るは、次の指摘をすることだけである。すなわち、構造が（一定の程度の構造には一定量を超える表象はあり得ないという限りにおいて）表象にとつての第一の条件である以上、より広範囲の時間意識も、潜在的には、その全般的性格を組織によつて固定されてい

るはずである、と。

### 第三四〇節

〈時間〉意識の生成と本性は一般に以上のように考えられるので、なお残されているのは、ただ時間を知覚するプロセスの本質とは何かを問うことだけである。

厳密に言えば、知覚 (perception) はここで概念 (conception) になる寸前の段階にある。というのも、通常の知覚において、意識の構成要素の多く、あるいはほとんどが現前する一方、いくつかが表象されているのに対し、時間のある部分の知覚の場合、ほぼ全ての構成要素が表象されている——過ぎ去りつつある感じだけが鮮明な仕方と与えられ、残りの全ては不鮮明な仕方と与えられている——からである。だが、このような留保をしたとしても、時間のある部分の知覚についてはただ、その部分を形成するものとして観照される継起的位置の関係を、一定の既知の諸関係へと分類すること——その部分をそのような既知の関係と同様のものとして認識すること——、それがその本質だとさえ言っておけば十分である。

## 第十六章

### 運動の知覚

#### 第三四一節

これまでの議論が示しているように、私たちの〈運動〉と〈時間〉、そして〈空間〉の観念は、密接な結びつきを有するものであるため、これらを切り離すことは非常に困難である。一方で、私が明らかになつたと考えているのは、〈空間〉と〈時間〉は〈運動〉を通じて知られ得るものだということである。他方で、〈運動〉は〈空間〉および〈時間〉の下にあるものとしてしか知られ得ないものだから、〈空間〉および〈時間〉の概念は〔運動より〕先に存在していなければならないと主張する者もおり、これも非常に尤もらしく見える。これらの立場を併せて考えるなら、カントの仮説を採用し、〈時間〉と〈空間〉は、〈運動〉が知覚される際の働きにおいて顕になる感性の形式であると結論する他に道はないように思われる。だが、より詳細に検討すれば、別の選択肢が存在することがわかるだろう。

というのも、発達した精神にとつては、〈空間〉と〈時間〉の意識が伴わなければ、〈運動〉の意識が形成されることはあり得ないが、だからと言って、未発達の精神における〈運動〉の意識にもそれらが伴っているということにはならないからである。上述の諸概念の結合が現在解消不能だからといって、それが常にそうだったということ

にはならない。こうした混乱は、諸感官によつて受け取られる印象は、元から、数多くの経験の蓄積を経て〔現在〕理解されているのと同じような仕方では全く異なるのである。子どもは幼児にはできないような仕方では家の形を理解しているという事、未開人と天文学者とは全く異なる仕方では全く違う仕方で考えているという事、物理学者は、音や光、熱について道化師とは全く違う仕方で考えているという事を私たちは知らないのだから。さらに言えば、リングを掴むとき、それを球状のものだと考えなくなるほどに触覚の<sup>(三)</sup>感覚に意識を集中することに大きな困難を覚えずにはいられず、近くにある物を見るとき、距離についての全ての思考を排除して視覚的感覚だけに注意を向けることは不可能であるように感じられるといった場合がそうであるように、私たちが獲得した知識の多くは、その諸要素を〔互いに〕分離することが不可能なほどにひとつに統合されてしまつてゐることが認められないだろうか。これら二つの一般的な事実——精神は自らのさまざまな経験を組み合わせることによつて元々持つていたものとは非常に異なる概念を獲得するということ、またそれらの経験のうち変わらなつとも組み合わせられるものは、内省によつては分割不可能な概念へと融合するようになるということ——を総合するならば、発達した知性に伴う〈運動〉の観念は未発達な知性が抱く〈運動〉の観念からは本質的に区別されるということ、そしてまた、発達した知性は、未発達な知性のような仕方では〈運動〉について考えることができなくなつてしまつてゐるということとは明らかではないだろうか。私たちにとつての思考に欠かせないものが、理論的な思考にとつても欠かせないものだというのは誤つた想定なのである。

「しかし、私たちが知つてゐるのは異なる形で知られる〈運動〉を論じることかどうして可能なのか、私たちが自分で持つことができな概念を、私たちはどのように扱ふべきなのか」と問われるかもしれない。非常

に容易いことである。というのは、私たち大人の〈運動〉の意識には、〈空間〉と〈時間〉の観念が解き難いほどに絡んでいるとはいえ、その意識の内には〈空間〉と〈時間〉の観念が欠けていたとしても残存するであろう、別の要素の存在が見出され得るからである。腕を動かすとき、私は暗闇においてさえ、踏破される一定の空間と踏破〔の動作〕が占める一定の時間とを同時に意識せずには、運動を意識することはできないが、私にとってその運動に伴う筋肉感覚が、それに結びついている〈空間〉および〈時間〉の観念と本性上全く異なるものであることは、明白なことである。私が筋肉感覚を〔空間と時間の観念から〕分離することに困難を感じないのは、それらの意識が、私の〈空間〉および〈時間〉の観念が消失したとしても、残存するだろうということがわかっていからである。さらに私は、〈運動〉は生まれたばかりの知性には筋肉感覚から出来ているものとして思考可能であるが、ここではまだ〈空間〉および〈時間〉の概念は発達していないのだということを理解するのにも、何の困難も見出さないのである。

このように、〈運動〉の原始的な意識を、運動の意識の内に最終的に含まれることになる諸要素のうちのひとつ〔筋肉感覚〕しか含んでいなかったものとして理解することは容易なことなのだから、当然、私たちが現在有している〈運動〉の意識は、そうした原始的意識から発達し得るのかどうかということを問題にしても良いだろう。

### 第三四二節

この問いに体系的に取り組み始めるため、まずはこれまでの章で得られた事実を見ておこう。

〔空間について〕 私たちが確認したのは、以下のことであった。私たちの〈空間〉意識は、共存的位置の間の全ての関係から抽象されたものである。また、その意識の原初的要素は二つの共存的位置の間の関係であり、二つの

共存的位置の間のいかなる関係も〔触れる〕主体と触れられる対象の間の共存的な位置関係へと分解可能である。さらにまた、主体と対象の間の共存的位置の間のそうした関係は、筋肉によってある一定の姿勢へと調節されているときは身体の二つの部分の間の共存的位置の関係と等価なものである。以上から、私たちはいかにして自らの〔空間〕認知を獲得するに至ったのかという問いは、私たちはいかにして私たちの表面の二つの感覚点の間の共存的位置の関係を見出すのかという問いに還元可能である。

確認したとおり、私たちの〔時間〕意識とは、私たちの意識の諸状態の系列における継起的位置の間の全ての関係から抽象されたものである。私たちが確認したのは、そこから時間概念が発達してくる原初的要素とは二つの意識状態の間の位置の関係であり、また二つの意識状態の間のどの位置関係も、介入する想起された状態の数によって知られるということであった。

〔運動〕に関して私たちが知っているのは、それによってのみ意識におけるさまざまな変化が新しく生じるがゆえに、運動によってのみ意識の継起的諸状態の間の位置関係が顕になることができ、同じ理由で、運動によってのみ、諸々の共存の間の位置関係が顕になることができるということである。それと同時に、私たちは、〔運動〕は——それが他の何らかの仕方でも最初から認識可能であるのか、そうではないのかは措くとしても——それが生み出す意識のさまざまな変化を通じて〔であれば〕初めから認識可能であるということも知っている。腕の運動のような主観的な運動であれば、それは精神に対して、連続的ではあるが変化する筋肉の緊張感覚の系列として現前する。身体表面を踏破するものや目の前を通過するもののような客観的運動であっても、それは精神に対して、連続的な感覚の系列として現前する。前者の場合、感覚とは皮膚の諸点への継起的な接触から生じるものであり、後者の場合、それは網膜の諸点の継起的な刺激から生じるものである。そして、身体のある部分が別の部分の上で引かれる



ときや腕が目の前で伸ばされるときのように、運動が主観的かつ客観的であるならば、それは精神に対して、二重の感覚系列として現前する——前者においては、筋肉感覚の系列にそれと同時に触覚的感覚の系列が加わり、後者においては、筋肉感覚の系列にそれと同時に視覚的感覚の系列が加わる。最後に、手が視界の内では身体の上を動かされるとき、運動は精神に対して同時に生起する——筋肉の感覚、触覚的感覚、視覚的感覚という——三重の感覚の系列として現前する。

視覚的な現象はひとまず措くとして、私たちの〈運動〉、〈空間〉、〈時間〉の観念の生成についての全論争が集中する問題に取り組むとしよう。その問題とはすなわち、私たちはいかにして身体表面上の二点の相対的な位置を認識するようになるのか、という問題である。そうした二つの点は、共存的なものと見做される場合、〈空間〉の原初的観念をもたらす。そうした二つの点は、二つの継起的な触覚的感覚によって意識へと顕にされる場合、〈時間〉の原初的観念をもたらす。そして、筋肉感覚は、それが生じる際にそれら二つの触覚的感覚を分離する場合、〈運動〉の原初的観念をもたらす。とすれば、検討されるべきは、これらの原初的観念はどのような順序で生じるのか、そしてそれらはどのように発達するのか、という問題である。

### 第三四三節

視覚的延長（第三二七節）と空間の視覚的知覚（第三三一節）について論じ、意識の継起的な諸状態がいかにして同時的諸状態へと統合され、それらの等価物と化すのかを示した際、すでにこれらの問題に応じる方途は用意されていた。網膜の印象に部分的に適用されていた分析のプロセスを、今度はより完全な仕方、身体全体の印象に適用すべきである。

そのために、被験体として、部分的に発達した生物——認識のためのデータを受け取ることができるとして、その身体上の二点をAおよびBと呼び、これらの間でひとつの關係がこれから確立されることになるでしょう<sup>(1)</sup>。これらの二点は「この生物の」腕が届く範囲のどこかにあるとする。仮定により、目下のところ、これらの点については何も知られていない。つまり、それらが「空間」において共存しているのか、「時間」において継起的な感覚を与えているのか、それとも「運動」によって關係付けられるようになるものなのか、といったことについては何もわかっていない。今、この生物が何にも触れないような仕方では腕を動かすとすれば、その意識にはある漠然とした反応、つまりは筋肉の緊張感覚があることになる。この感覚の特徴は、その始まりも終わりもその間の変化も明確な境界を持たない(indefinite)なものである。この感覚の強さは、収縮の度合いに比例するため、次のことが帰結する。すなわち、腕は、収縮がない状態から動き始め、最高度の収縮が必要となる位置へと、それらの間にあるさまざまな程度の収縮を要する位置を通過するだけで到達でき、また収縮の度合いはそれゆえに、ゼロから徐々に増えていく系列を構成するため、緊張の感覚もまたそうした系列を形成することになるのである。さらに、その後にくる全ての運動に伴う諸感覚も同じように増加するか減少する系列を構成するはずである。というのも、筋肉がある状態から別の状態へと移行する際に、それらの間にある全ての状態を経由しないということとはあり得ないのだから。したがって、そうすると、その生物が、腕を後ろや前へ何にも触れることなく動かす際に有する意識は、複数の状態へと明確に分割可能なものではなく、大小の波のように、一方から他方へと感知不能な仕方に変化するような意識だということになる。明らかにそうした意識は、生まれたばかりの意識に過ぎない。その諸状態は、そのように不明瞭な仕方では「相互に」分たれているのだが、それらを明確に比較することや、分類すること、本来の意味で思考することは不可能

であり、したがってまたそこには、私たちが理解するような意味での〈運動〉や〈時間〉、〈空間〉の觀念もあり得ないのである。腕が何かに触れるとしよう。ある急激な変化が意識に生じる。その変化の開始は鋭く、腕が移動されるなら、その終わりも鋭いものである。漠然と強まったり弱まったりする筋肉の緊張の連続的な感じの只中に突然、〔それまでの感じとは〕別種の、ある特徴的な感じが生じるのである。その感じは、急に始まり急に終わるため、ひとつの明確な境界を持った (definite) 意識状態を形成し、言ってみれば、意識におけるひとつの印 (mark) となる。その他にもこれと同様の印がその他の似たような行為によって生み出され、そうした印の数が増えるにつれて、それらをその強さと相対的な位置の双方について比較することが可能となる。それと同時に、筋肉の緊張の諸々の感じも、言わば、それらに重ねられた印によっていくつかの長さへと分割されるので、同じように比較可能なものとなり、そのようにして、思考の単純な順序にとつての素材が獲得されることになる。さらに、多くの〔外的な〕事物が継起的に触れるとき、それらの触覚的感覚は、(介在する筋肉感覚によって分離された) 継起的な印を意味にもたらず一方で、腕の先端がある表面に沿って引かれる場合のように、諸々の筋肉感覚と共起的となることがあることに注意しよう。そしてまた、腕の先端がその上で引かれるところに、諸々の表面が、外的な物体ではなく、その生物自身の身体の一部であるとき、上記の筋肉感覚と、それに加わった連続的な触覚的感覚には、その上で腕が引かれる皮膚の部分に由来する触覚的感覚の系列が伴っているという点にも注意されたい。

ではここでは何が起きていて、それは何を意味するのかを見ていこう。この生物が腕の先端をその身体表面に沿ってAからZへと動かすとき、その意識には、三つの感覚の集合が同時に与えられる。すなわち、働いている筋肉から生じる感覚の変化する系列と、AからZの間で継起的に触れられる皮膚の諸点から生じる触覚的感覚の系列、そして腕の先端からやってくる触覚の連続的な感覚の三つである。すると、こう主張されるかもしれない。共存概念

と空間概念は共通の起源を有している——感覚の二元性ないし多数性を意識することは、それらの感覚が含意する空間上の諸点の二元性ないし多数性を意識するに至るための第一歩である——以上、こうした感覚の同時的な受容——これらの感覚を共存的なものとして観照すること——においては、空間概念に向けた、いくらかの進展が見られるのだ、と。あるいはこう主張されるかもしれない。腕がZからAへと戻されるとき、継起的感覚は逆順で生じるので、空間概念の生成へのさらなる一步が踏み出される——というのも、共存的なものだけがどんな順序でも等しい鮮明さでもって意識に印象を与えることができるのだから、と。だが、これらの主張については示唆するだけに留め、本質的な論点へ移るとしよう。先の運動の後に続く、AからZへの、腕の表面上の運動はいずれも、似たような同時的感覚の集合を帰結するため、時間の経過と共に、それらの集合は、切り離すことができないほどに結びつくことになる。AからZへの触覚的感覚の系列は、外的な物体が同じ表面を動くことでも生じ得るため、他の系列から分離可能なものではなく、また、その表面——頭にあるとしよう——が頭の動作によって引つ込められ「触れることができなくなると、筋肉感覚を伴う（それまでと）同じ腕の運動が、いかなる触覚の感覚もなしに生じることもあり得る。しかしながら、腕の先端に由来する触覚的感覚によって結合されるとき、これら二つの系列は必然的に一緒に生じ、思考において不可分な仕方で結合されるに至るのである。その結果、AからZへの触覚的感覚の系列と、自然に生じる際に常にそれに伴う筋肉感覚の系列は、「互いに」等価物として機能し、同じ経験の二つの側面であるがゆえに、意識において互いを示唆し合うことになる。皮膚上で継起的な感じが喚起されることで、連合は腕において習慣的に相関している感じの諸観念をもたらし、さらにその感じが喚起されることで、連合は皮膚において習慣的に相関している感じの諸観念をもたらし、さらなる注意が払われたところまで、何かが同時にAからZまでの表面全体に触れたときに何が起こるのかという点について考察して行こう。この表面

は一連の独立した神経纖維を備えていて、それらはいずれも、皮膚の特定の範囲内の印象から別々に影響を受け、別々の意識状態を生み出している。この表面に沿って指を引くと、それらの神経纖維A、B、C、D、…、Zは、継起的に刺激される——つまり、継起的な意識状態を生み出す。しかし、何かAからZの間の表面全体を覆うなら、それらの神経纖維は同時に刺激され、単一の意識状態と化すことになるものを生み出す。すでに私は、似たような事例において（第三三節）、元々は相次いで生じるものとして知られていた諸印象が一度に生じるとき、元々の印象の継起的な位置は共存的位置へと変換され、後者は頻繁に現れることによってひとつに統合され思考において継起的な位置の等価物として用いられるようになる、そうしたプロセスについては説明したので、ここでそれを繰り返す必要はない。私たちの目下の関心事は次のことを指摘することである。すなわち、意識において継起的な位置を有するものとして知られるAからZの触覚的な感じの系列は、それに伴う筋肉の感じの系列の等価物であり、またその同じ触覚的系列は、共存的位置において現前するAからZの同時的な触覚的感じの等価物でもあるということが判明した以上、後の二つ「筋肉の感じの系列と同時的な触覚的感じ」は互いに等価物であることが判明するのだ、と。ある筋肉感覚の系列が、ある共存的位置の系列に対応するものとして知られ、習慣的にそれに加わるようになる、最終的にそれは共存的位置の系列なしでは思考不可能なものと化してしまうのである。したがって、A点とZ点（また結果的に、介在する全ての点）の間の共存的位置の関係は、必然的に、諸経験の比較によって顕になる——つまり、〈空間〉、〈時間〉、そして〈運動〉の概念は一緒に発展するということである。AからZへの継起的意識状態が相対的位置を有するものとして考えられるとき、〈時間〉の概念が生まれ始める。それらの意識状態が同時に生じるとき、以前は継起的なものであったそれらの相対的位置は共存的になり、そのとき原初的な〈空間〉意識が生まれる。さらに、共存的位置の関係と継起的位置の関係という二つの関係が、筋肉の緊張感覚の系列と共

に意識に現前するとき、原初的な（運動）の觀念が帰結するのである。

経験がさらに蓄積し、比較されることによって、こうした原初的觀念が発達していくことを理解するのは容易なことだろう。ひとつの共存的位置関係に、あるいはむしろ、諸々の共存的位置から成るひとつの線系列に起こることとして説明された事態は、同じ期間の内に、身体の「表面」の全方向に走る無数の線系列にも起こっている。ある共存的な触覚の印象の系列とある継起的な触覚の印象の系列、そして筋肉の継起的な印象の系列、これらの系列の間にあるのと同様の等価性が、四肢の動作によって容易に関連付けられ得る諸点の全てのペアの間に確立されるようになるのである。

#### 第三四四節

だがここで、批判に応え、修正を施さなければならないある論点が存在する。私たちが扱っている複雑なプロセスは、その全部分を常に同時に考慮するような仕方では説明不可能であるため、議論を簡潔にしようと、〈時間〉、そして〈空間〉というこの三重の意識の発達について、私はあたかもこれらのうちいくつかだが、それ以外のもの以前に十分に、しかもそれ以外のものから独立して組織されるかのような説明を与えていた。しかし実際のところ、これら三つの概念は共働的に発達していくものであり、いくつかの要素の発達は、その他の要素の発達に幾分先行しているのである。

というのも、事柄を慎重に検討するなら、意識に対してAからZまでの全ての別々の感じを生じさせるのに必要な神経繊維を備えた皮膚表面によって議論をしようとする場合、説明を要する多くの仮定が置かれていることが明らかになるからである。そうした多くの互いに独立した神経繊維と、それらに接続された多くの互いに独立した中

枢的な要素——これらが神経繊維によつて刺激されることで互いに区別される諸状態が意識に生じる——とが予め存在しているということは、実際のところ、AからZまでの位置の潜在的な意識——何かAからZまでの表面全体に同時に触れるならそれらの位置が共存的なものとして意識されることになるという点で潜在的な意識——が予め存在しているということである。ここから直ちに次のような問題が生じるだろう。終端を抹消と中枢に別々に有するそうした一連の神経繊維は、どのようにして存在するようになったのか。そしてまた、そうした構造が予め存在することを当然のことと見做してしまうのは、論点先取ではないのか、という問題である。

こうした問題に対して、私はこう答える。すなわち、「運動、時間、空間の觀念の」生成のプロセスは、器官の生成一般のプロセスと同様の仕方である——つまり相互の支援によつて、すなわち、ある働きの発達の程度が増大することとそれ以外の働きの発達の程度も増大するというような、作用と反作用によつて——進行するものなのだ、と。もし仮に消化器系や血管系、呼吸器系の進化を、胃が生まれたので吸収した栄養を運ぶために心臓が生まれ、さらにその栄養を純化する役割を果たす肺が生まれたといった仕方で説明してしまえば、さまざまな事実をそうした単純で連続的な順序で並べることによつて、進化の過程を大いに歪曲してしまうことになるだろう。上位の消化器官は血液を循環させ酸素と結合させるための上位器官なしには形成され得ず、循環器官の発達は非常に発達した呼吸器官が無ければ不可能であるといったような、相互依存が至るところに存在しているからである。そうではあるのだが、つまりそうした相互支援は不可欠ではあるのだが、これらの機能のうち一方が他方を可能にするのは、先に名前を挙げた順序においてであるという点は依然として真理であり続ける。吸収された栄養の供給があるまでは、それを分配するための器官は機能を持ち得ず、それを分配するための器官が存在するようになるまでは、吸収された栄養を酸素と結合させる器官は機能を持ち得ない。それらの進化の過程において、「栄養の」吸収は循環に先行

しなければならず、循環は呼吸に先行しなければならぬが、こうした順序は維持されるため、それら器官の進化は足並みを揃えて進んでいくのである。私たちが目下考察しているさまざまなプロセスについても同様である。それらの器官は、いずれも独立して発達することはできないという点で互いに役立つものとして認識される必要があるが、それらはまた、第一のステップが踏み出されてからでなければ第二のステップは可能とはならず、第二のステップが踏み出されてからでなければ第三のステップは可能とはならないという関係を維持しているものとしても認識されなければならない。あるいは、より明確に述べるなら、皮膚の隣接した部分からやってくる別々の印象を意識に与える構造が一段階発達してからでなければ、腕がそうした部分の上を動くことでそれらの位置を触覚的・筋肉〔感覚〕的な継起として意識に与える構造のさらなる発達はあり得ず、これら二つの構造が共に一段階発達してからでなければ、諸部分の位置を共存的なものとして意識させると共に、それらの位置を、一方から他方への経過を伴う継起的な触覚的および筋肉的な感じという形で知られる距離をもつものとして意識させる構造のさらなる発達はあり得ないということである。

したがって、これまでの説明は、〈運動〉、〈時間〉、そして〈空間〉という三つの意識は、身体全般の進化に伴って進化しているという点で、修正されなければならない。身体全般の進化とは、体の大きさの進化——これにより、別々の神経繊維を持ち得るより多くの個別的な部分から成る広い表面が得られる——、構造の進化——これにより四肢が発達し、運動と移動のためのより強く変化に富んだ能力が獲得される——、そしてこれらの進化に付随するさまざまな神経と神経中枢の進化のことである。生物とその環境の間の交流、生物の諸部分間の（相互探索による）交流によって、これら三つの意識は——神経系そのものがひとつひとつの神経や細胞から作り上げられているのと同じように——ひとつひとつの要素から作り上げられているのだと考えられねばならない。私たちはまた、いかな



る水準の新しい構造的単位（とそれが生み出しそれに伴う意識の機能的単位）も、それが他の水準の新しい単位を生み出すために協力し始めると同時に確立されることになるのだと考える必要がある。

いくつかの生理学的実験によって、身体の表面上のそうした相互探索がそれ自体、個別的感觉領域の数の増大を促進すると同時にそうした領域の間の関係の意識を発達させるという信念に対して、強固な支持が与えられている。ヴェーバーによって確かめられた事実によれば、任意の部分の触覚による弁別能の程度は、その部分自体の他の部分による習慣的な探索への曝露に比例しているほどには、その部分と周囲の物体との数多くの接触（の機会）には比例していない。例えば、顔の表面は、物体を触覚的に探索することには全く使われないのにもかかわらず、相対的な位置を区別する能力に富んでいる。頬は手のひらと同じくらい大きな知覚力を持っており、額の下部は手の甲よりも大きな知覚力を有しているが、これは、手と顔の間には絶え間ない交流が存在するからだと解釈できる。このことを理解するには、前腕の中央部や大腿の中央部、首の後の中央部や背中の中中部は、手によって最も探索されることのない表面であるために、頬の六分の一の触覚的な弁別能しか有していないことを確認するだけで良いだろう——これは目的論的な仕方では全く説明不可能な事実なのである。したがって、いまや私たちは、以下の信念に対する帰納的な根拠を手に行っていることになる。それは、凸文字を読むのに慣れている盲人の指において、知覚力の増大によって示唆されるあの神経繊維の増加が生じると同じように、一般的な進化の過程においても、任意の表面で——それが身体以外の物体による探索によって生み出されるものであろうと、自己探索によって生み出されるものであろうと——個別的な接触の数の多さに比例する形で神経繊維の数の増加が生じるのだという信念、そしてまた自己探索による場合には、上述したような同時的な発達も生じるのだという信念である。

あとはこうした解釈から得られるひとつないし二つの一般的な帰結を一瞥しておきさえすれば良いだろう。

### 第三四五節

各々の個別の筋肉の系列と、それが行為において連合する各々の個別の（繼起的および同時的な）觸覺的系列との間の思考における接続の確立、またそれに伴って生じる、各々の特定の部分に触れるために必要な特定の筋肉の調整についての知識の確立に加え、さらに、筋肉の系列一般と繼起的および共存的位置の系列一般の間の接続を決定的な仕方で確立することが必要である。というのも、この（最後の）接続は全ての個別的な経験において反復されるものなのだから。そして、そうした経験が無限に反復されることを考えるなら、なぜ、手が暗闇の中で何にも触れることなく動かされるときでさえ、そこで手が動かされるところの繼起的および共存的位置——（時間）と（空間）——を意識することなく筋肉感覺を意識することは不可能であるほどにそうした経験の構成要素はひとつに統合されているのか、ということを理解するのに困難はないだろう。

再び次のことに注意を向けておこう。先に示したような連続的探索によって、皮膚上の各点は、一方向だけでなく、全方向へと広がっている無数の点と関係を持つことになるため、ある大きさの対象が皮膚の上に置かれると、覆われた領域の全部分からの印象は同時に意識に現前することになり、そうした印象は、意識の下で共存的な位置を占めることになる——ここから、身体その部分の表面の延長の觀念が帰結する。こうした延長の觀念は、その部分が含まれる多数の点に由来する全印象の同時的な現前でしかなく、それら多数の点は、それ以前から、それらを分離する印象の系列によって測定される多数の相対的な位置を有していたのである。この結論を認める気にならない者であっても、頬に本を押し付ける際に得られる知覚について批判的に考え、その知覚は、その全てを一緒に思考することが不可能な多数の要素から構成されていること、また触れられた表面全体のうちの一部はつねに他のどの部分よりも判明に意識されるということ、さらにはその他の部分について十全な意識を持つに至るためには思考におい

て介在する部分を踏破しなければならぬ——これらの部分の相対的位置について思考するためには、皮膚上のある点から別の点へと運動がもたらし得る意識状態の系列を漠然とであれ喚起しなければならない——こと、これらの事実には気付けば、上述の結論を採用するだろうと、私は思う。

視覚経験が触覚的および筋肉的経験に統合される際に生じることになる、これらの「運動・時間・空間という」根本的な観念の発達についてここで詳述する必要はない。同じプロセスがさらに複雑になるだけのことには過ぎないのだ、上述の説明に、視覚的延長と空間を扱った際に与えた説明を加えれば、容易にその概略を示せるだろう。ここで私が付け加える必要があるのは、次のことだけである。すなわち、私たちの精神の内に主観的運動と客観的運動の同一性を確立するのに明らかに役立つがゆえに、視覚によって私たちは、「運動」をほぼ完全に、それによって運動が私たちに最初に知られるところの筋肉感覚から切り離すことができ、そうすることで、そしてまたそのようにして私たちの「運動」の観念を、「時間」における継起的な位置を占める空間における共存的な位置の観念へと還元することで、視覚は、これらの観念の間に見かけ上の必然的な接続を生み出しているのだ、と。

### 第三四六節

そこでこう結論しよう。すなわち、元々は筋肉感覚の系列という形で現前していた「運動」の意識は、触覚的経験と結合することで、私たちに「時間」と「空間」を頭にする役割を果たし、それらを頭にする働きにおいて、「運動」の意識は、「時間」および「空間」の観念に覆われ、最終的にはそれらの観念なしには思考不可能なものとしてしまふのである、と。

最後に述べておけば、私たちが理解している意味での「運動」の知覚とは、二つの関係——「空間」における共

存的位置の関係および〈時間〉における継起的位置の関係——の間にひとつの同時的関係の意識を確立することを、その本質とするものである(ただし、これらに加え、そこには当然、これらの位置を継的に占める何かについての意識が生じている)。そしてまた、知覚の働きにおいて、結合された状態で現前するそうした諸々の関係は、それぞれが既知の類似した諸関係へと同化される。それゆえに、大きな速度の知覚は、二つの共存的な位置を離れたものとして、また二つの継起的な位置を近いものとして、同時に思考することによってのみ可能となる。というのも、遠いや近いという言葉は、二つの関係を以前に経験された関係へと分類することを含意しているのだから。同様のことは、運動の種類、知覚や運動の方向の知覚についても言うことができるだろう。

## 原注

(1) 第一版のこの箇所では新生児の例を用いていたので、説明すべき経験の組織化は、ある個体の生の間に生じるものであることが示唆されていた。この「特殊分析(Special Analysis)」(本書第六部の表題)は、元々(第一版の順序が示しているとおり)「特殊総合(Special Synthesis)」の前に書かれたものであったので、その結論は、「特殊総合」において〈進化〉仮説によって導かれた結論とは十分な調和に至っていない。しかしながら、これまでの章の修正された議論が明らかにしたように、これから扱われるこれらの関係は、新生児によって遺伝的に継承された神経構造においても、潜在的には確立されていることが認められるはずである。新生児が経験した胎児期の変容はすでに、祖先にあたるさまざまな種の計り知れない期間に渡る

経験によって徐々に生み出された変容を、短い時間で反復している。だが、漸進的な変化が、経験によって生み出された変容が次々と伝達されるといふ仕方では長期に渡って一連の個体によってもたらされると考へる場合でも、ひとつの連続的に存在する個体においてもたらされると考へる場合でも、議論は本質的な点で同じであることに変わりはない。ここで想定されている部分的に発達した生物は、それゆえ、連続的に存在する個体として理解されるか、あるいは、通常はさまざまな種や属や目の生を通じてのみ受け取られるような変容を、その生物の生の間において受け取っているものとして理解される必要がある。

## 訳注

- (一) 原文では progress, evolution, advance, development といった語彙が(動詞の場合も含め)多用されているが、必ずしも明確な使い分けが行われているわけではないように思われたため、これらの語彙については訳文でも訳語に厳密な対応関係を与えていない。
- (二) 訳文だけでは把握しづらいように思われるので補足しておく、本稿で「触覚」という語彙が単独で用いられる場合の原語は touch であり、「触覚的」という語彙が用いられる場合の原語は tactual ないし tactually である。

- ・ 訳者による補足部分は「〔」で示した。
- ・ 原文で大文字で始まる単語には「〔」を、イタリックの箇所には傍点を付した。
- ・ 訳文中のダッシュと（ ）は必ずしも原文に忠実に従ったものではない。また（ ）は原語を併記する際にも用いている。

訳者付記

本稿は、ハーバート・スペンサー『心理学原理』の第二巻第六部「特殊分析」の第一章「時間の知覚」および第十六章「運動の知覚」の全訳である。底本としては、ウェブ上で参照可能なものの中で最も発行年の遅い、次を用いた。*The Principles of Psychology*, vol. II, D. Appleton and Company, 1920. 本書の初版は一八五五年に、大幅な改訂が行われた第二版は一八七〇年（第一巻）と一八七二年（第二巻）に、寄せられた批判への応答を含む新たな区分が加えられた第三版は一八八〇年にそれぞれ出版され、版を改めることに新しい序文が付されている。その後の版には序文の追加は認められないものの、第二巻については少なくとも一八九九年まで加筆が行われていたことが、該当箇所（底本五〇五頁）への著者による執筆年の記載から確認できる。スペンサーの著作集には、*Collected Writings* (12 vols., Routledge, 1996) と *The Works of Herbert Spencer* (21 vols., Osnabrück, 1966-1967) があり、後者はその一八八九年の版のリプリントであるため、原文が気になった場合などは、そちらを参照しても

らつても構わない(少なくとも訳出箇所に関して異同は確認できなかった)。ただし前者所収の第一版と第二版以降の版との間には相当量の異同があるので注意が必要である。

ジョン・スチュアート・ミルとの論争を引き起こし、ウィリアム・ジェイムズやヒューリングス・ジャクソンといったビッグネームへとその内容が批判的に継承されるなど、スペンサーを世に知らしめるに至った最初の著作である<sup>(1)</sup>本書『心理学原理』は、哲学や心理学、神経学等のさまざまな分野に多大な影響を与えながらも、現在ではほとんど取り上げられることのない、文字通り歴史の波に埋もれてしまった大著と言つて良いだろう。二巻合わせて一三〇〇頁以上というボリュームのせいもあつてか、明治から昭和初期にかけて主に社会学や教育論の分野でスペンサーの思想が輸入された際にも本書は訳されておらず、日本語ではその概要を把握することすら難しいというのが現状である<sup>(2)</sup>。もつとも、こうした状況は国内に限つたことではない。知覚や記憶、時間や空間に関する現代的な議論のルーツが遡られる場合であつても本書の内容が参照されることは(とりわけ哲学においては)稀だからである。だとすれば、本来はスペンサーのものであつた着想が、いつの間にか後世に活躍した心理学者・哲学者に帰されてしまつていくといったケースが多々あるのではないか——訳者が本書に取り組み始めたのは、まさにそうした観点からであり、とりわけ「時間の知覚」と「運動の知覚」の二つの章は、ジェイムズの『心理学原理』やベルクソンの『意識に直接与えられたものについての試論』、あるいは彼らと同時代の思想家たちにとって重要なリソースであるように思われたため、まずはこれらを訳出対象に選んだ次第である。

きっかけはそのようなものであつたのだが、翻訳を進めていくうちに、それまでリボーによる紹介<sup>(3)</sup>を読んで知つた気になつていた基本的な主張とは別に、個々の議論や記述のスタイルそのものの魅力に気付き、本書は、単に歴史的資料として扱われるのではなく、それ自体として広く読まれるべき著作だというように認識が改められた。

いくつかの章の翻訳作業は、今後何回かに分けて継続して行っていきたくと考えているので、解題はある程度の量の翻訳が完了してから行うこととしたい。また、訳者が専門とするベルクソン哲学と本書の関係については別稿で詳細に論じる予定である。

今回訳出したテキストの多くの部分は、二〇二二年度の大学院の演習で用いたものである。受講生であった、山田太朗、遠山裕菜、佐々木健人の各氏との議論を通じてテキストの理解を深めることができた。ここに記して感謝したい。

岡嶋隆佑（おかじま・りゅうすけ／新潟大学人文学部准教授）

注（訳者付記）

(1) *Collected Writings* の第四巻への編者テイラーによる序文 (pp. xvii-xix) を参照。

(2) 例外的に、田中治六『心理学史』（哲学館、一九〇〇年、一一一―一六三頁）ではまとまった紹介が行われている（国立国会図書館デジタルコレクションから閲覧可能）。また訳者がこの田中の著作についての情報を得た以下の論考は、感情論を主題とするものであるものの、本書の概要や関連文献を知る上でも非常に有用な構成となっている。ぜひ併せて参照されたい。本間栄男「ハーバート・スペンサーの感情論」、『桃山学院大学社会学論集』、第四八巻第二号、二〇一五年、六三―一〇四頁。



(3) Cf. Th. Ribot, *La psychologie anglaise contemporaine*, 3<sup>e</sup> edition, Librairie Germer Baillière et Cie, 1881, pp. 161-247. テオデュール・リボーは『心理学原理』の仏訳者でもある(アルフレッド・エスピナスとの共訳)。スベンサーに限らず、英国の心理学を積極的に紹介していた彼の存在によって、フランスでは比較的早い時期からスベンサー心理学が受容されていた。このリボーの著作もその一部に含まれるセルジュ・ニコラによる叢書 *Encyclopédie psychologique* に収められた『心理学原理』の仏訳版 (*Principes de psychologie*, 2 tomes, L'Harmattan, 2007) には、ギヨーム・ド・グレーフによって一八八二年に書かれた本書の詳細な要約も再録されている。